

土

淨

號 月 十

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
（毎月一回）日發行
昭和十八年九月廿日印刷
本・昭和十八年十月一日發行

第九卷 第十號



金

安西覺承著

新刊 法然上人の和歌

B 6 版六十四頁 定價五十錢 送料四錢

まことにわが祖法然上人は天成の歌人であられた。そのお歌はどこまでも歌としての美しさに輝く歌である。調子のよさ、格律の正しさ、技法の緻さ——實に立派な歌品であつて、優にこれを當時の一流歌人の勞作に比することができよう。(著者の言葉)

法の歌によく上人御遺徳の結晶をみる。み詠こそ上人のお姿であり、み教へてある。上人の御作として確實な和歌全部(二十首)について一々懇切な語意、通釋、感想をのべ、金玉の詞花がそのまゝ讀者のものとなる定本である。

發行所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
總發東京八二一八七番

陸海軍
病院 慰問「淨土」應募のお勧め

白衣の勇士に

法味を捧げよ!

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月新刊の信仰雜誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士に法味を捧げ、大變喜ばれてゐます。

◇一口一圓五十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。振つてこの聖き運動に隨喜して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務變部宛に! 領收の證には宗報及び「淨土」の誌上に御芳名を掲載します。

◇多數の陸海軍大臣の感謝狀、勇士からの謝狀がこの意義ある運動の全貌を語つてゐます。

申込所

淨土宗務所

東京市芝區芝公園明照會館
總發東京一五一一一番

淨土十月號 目次

表紙・目次カッパ……………鈴木金平

南方戰鬪と建設……………湊邦三(八)

西峽盛慈悲・無慈悲……………佐藤賢順(三)

山莊新秋……………吉田絃二郎(二)

子らよ、行け大空へ……………小林岩太郎(七)

長壽と粗食……………出口林次郎(六)

比島とかげの獨唱……………野中勳夫(六)

信仰相談……………糸山天真(三)

宗教とんちん物語……………糸山天真(三)

高僧一佛敎と神ながらの精神……………(二)

光圀と心越禪師……………(元)

歌壇……………岩野喜久代選(七)

俳壇……………太田耳動子選(元)

奇談實鼠と蛇の闘ひ……………村瀬秀雄(四)

法説至誠の人となりたい……………中村辨康(元)

編輯後記……………(三)

法然上人御法語

無智の念佛者なりと

いへども、かの智慧光

を以て攝取し給ふが故

に、よく愚痴の罪障を

を滅して、即ち智者と

異なりあることなし。



金



山 莊 新 秋

吉 田 絃 二 郎

八月九日 晴 日暮るゝころ、水鶏鳴きて、浅間は霧に隠る。夜雨あり、思ふこと深し。

八月十一日 晴 山莊の中の調度などを整ふ。今年は來客用の番茶碗三個を揃ゆ。一枚の坐布團なく、ただ一脚の机ありて、食卓ともなる。一小壺あり、野の花を挿すに足る。書としては芭蕉全集、一茶句集、世阿彌傳あるに過ぎざれど寂しからず。

朝ごとに未明の空に浅間を仰ぎつゝ、谿を下り、谿を登り、いかる、鶯、郭公、せんだいむしくひ、雉子鳩を聴く。

今夜は沓掛の里に盆踊りあり、夜更けて太鼓の音の山にこだまするを聴く。

稻妻や太鼓の音の更くるころ

八月十二日 晴 四時半起床。今日をはじめて東京より送り來たりし新聞を読む。戦ひの苛烈さを思ふ。町に下りて馬鈴薯、葱、玉蜀黍などを購めて歸る。

夕刻まで裏の山にていかる鳴く。

京都なる友人より幼き人をわが山莊に送る由電報あり、八時就寢。心澄み、氣徹して眠り難し。

信濃路はさびしかりけりいかる鳴きて

あしたゆふべに霧のこめれは

八月十三日 晴 四時半起床。

東京よりの新聞を読む。南方に北方に戦ひつゝある勇士たちのことを思うては黙黙合掌するのみ。建國この方の大國難に際して、たまゝ生を享けたる身の果報を憶ふ。



木啄は今日も落葉松に來たりて單調なる音を響かせ
つゝ木を啄きつゝあり。

村の若き警官笹田氏林檎を持ち來たりて語る。笹田氏は戦傷の勇士なり。滿蒙の戦線に砲彈の炸裂によりて右脚を傷つけられし由。

八月十四日 晴 四時半起床。終日淺霽れたり。山に入りて落葉松の枯枝を拾ふ。夜七時半寝ぬ。雨の音を聴きつゝ眠る。

八月十五日 雨 朝「壽貞尼」の原稿執筆に着手す。夕刻雨わづかに止む。山を下りて驛に行く。京よりの幼き人を迎へんためなり。木曾路を経て鹽尻より篠ノ井に出で、十三時間の汽車の旅を獨りにて來しことゝて、暗の中に佇むわれ等を見て初めて旅のわびしさを忘れしなど語る。いぢらしき心地す。

八月十六日 晴 四時半起床。

羽黒の武若主典より來信。八年前の秋、芭蕉翁の「おくのほそ道」の趾を慕ひてたまゝ羽黒より月山に登りしをり、湯殿まで三日の間、ねんごろに、わがために東道の師となりし人なり。

羽黒より登りて、月山の嶺まで十餘丁のところに至

りて、日暮れ初め、黄昏れの中に雪溪の杳然として横たふを眺め、をりからの強風驟雨に幾度か谷底に吹き飛ばされんことを恐れ一歩立ち上りては岩陰に臥し、一歩進みては再び地に匍匐して風雨の止むを待ちしことなどを想ひ出しぬ。

その夜は月山頂上の岩屋に篠を片布きて寝ねれば、夜半に至りて雨止み、月飛雲を破つて狂風に冴ゆる思ひ。同宿の修驗者わがために深夜の山嶺に立ちて貝の音をとどろかす。莊嚴幽玄言ひ難きを覺えたりしか。

八月十七日 晴 夕刻より雷鳴はげし。

新聞紙、若き學徒の陸海荒鷺志願者について語る。國に殉ぜんとする若き學徒の純情を思ふ時、誰れか頭を垂れて國歩艱難に心を空しくせざるものあらん。「生」とは何ぞや。死とは何ぞや。かつての學徒たちはこの問題のために或は哲學に、或は宗教に、その歸するところを究明せんとして迷ひぬ。畢生の研鑽を傾けてしかも、闡明空しくして止みぬ。

十九世紀末のロシヤ文學然り、西歐文學然り。今日の青年學徒たちはすでに生死の問題を超越したる境に詣し得たり。



生死觀が理論の對象である限り、未だ眞の力となることを望むは不可能である。哲學者も宗教家も幾十年が間、迷ひに迷ひ、疑ひに疑ひつゝ寂然として生涯を終る者多し。

しかるに最近の若い學徒たちは大死一番、生死を超越して、生死共に無き境涯に達せり。羨ましき限りなり、尊きかぎりなり。

八月十八日 曇、いつの間にか落葉松の葉も落ちはじめた。山の鳥の聲も稀になり、霧雨の中を雛を連れたい雛子がしきりに子を呼びながら、餌をあさつてゐる。雛子の子を思ふ情の切なる姿にはしばしば胸を打たれる。濡れ縁に近く机を置いて、寫經をしてゐると八羽も十羽も雛を連れた母雛子が、數歩の近くまで寄つて来てきよんとわたくしの方を眺めてゐる。獵夫に撃たれるな！わたくしはそんなことを考へつゝ寫經の筆をすゐめる。

八月十九日 小雨 今日いかる鳴けり、霧時雨降りて寒し。

けふもまたいかる鳴きをり山寒み

信濃の國はなつかしきかな

八月二十日 晴 六里ヶ原に行く。六里ヶ原百體の地藏尊の御姿の芒原に隠見し給ふもさびしく尊し。白根の麓に住みし友の今は世に無きを想ふ。道にて語り合ひし夫婦連れの旅人と牧場のほとりにて袂を分つ。草に隠れ、遠ざかり行く姿を送るにあはれなる心動く。十餘年前

篤志寄附者芳名

左記の通り篤志寄附下されました。厚く御禮申し上げます。

爲故楠美正五郎英靈追善

金五十圓

青森市正覺寺 楠美龍祥殿

金三圓

福岡縣八女郡水田浦町 近藤ハル殿

前號所載御芳名に誤植がありましたので、左記の通り訂正いたし、お詫び致します。

ます。

金一百圓

平壤府大和町華頂寺 中川大仙殿

金十圓

神繩縣島尻郡東風平村 島添榮文殿

八月二十六日 晴 碓氷

り去し滅に穴墓たつ堀ら自は者弱きな義信
 ずが揺てじ斷てしに動不は念信の勝必軸樞
 け拔ち勝てつ勝でりばんふの後最の面兩心物

忍耐と努力を以て、突撃に進め

現在、わが陸海空の精銳は西に英國にとつての生命線たる印度の一步手前まで進んでゐるし、東に米國の反抗據點たる濠洲の入口の所まで行つてゐる。こうして印度、濠洲といふ目標にもう一息といふ目と鼻の所に、わが皇軍が立つてゐる。だがこの一步を踏みこへて敵を壓倒殲滅することはもとより容易なことではなく、そのために、並々ならぬ諸準備を整へてゆく必要のあることは誰にも判る。飛行機を船を、彈を、あらゆる軍需品を送り戦力を増加して最後の勝利へと突き進むまで、われわれは齒を喰ひしばつてがんばり、忍耐と努力を以て續けてゆくことが一億國民の決心である。一刻もゆるがせに出來ぬ覺悟である。

しかも今米國は濠洲を據點として多くの基地を持つて、先づ空中からわれを制せんものと死もの狂ひになつて反抗してゐる。これに對して皇軍は本土から遙か遠くにあつて、多くの不利と困難を克服しながら、常にわれに數十倍するといふ敵と戦つてゐる。日に夜をついで行はれてゐる苛烈深刻なる決戦に、われわれは黙つて白兵突撃を敢行しようではないか。

峠に登る。社家町にて不圖新聞を讀み、キスカ島皇軍無事撤收のことを知る。天佑神助、合掌して拜するのみ。

八月二十七日 晴 小諸に遊び、古城のほとり藤村先生の詩碑の前に佇立する。先生世になきもその文藝は不窮なり。一人の力の偉大さを思ふ。憶むらくは電力工事のため千曲川の流れ昔日のごとくならざるを。

九月一日 晴 震災記念日なり。憶ふこと多し。夜麓の家を訪ふ。警戒警報發令せらる。眞暗な山道を幼き人を伴ひ、折からの雨を冒して山莊に歸る。雷鳴はげしく凄慘なり。

山中一點の燈なく。幼き人と對坐してたゞ電光のものすごきに胸とどろかすのみ。

九月六日 晴 三時半に起きて火を焚き、夜の明くるを待ちて山を下る。渡り鳥の群飛ぶ。京に歸る幼き人を送りて、木曾に袂を分たうためなり。わがために薪水の勞を取りし幼き人を思へば尊くも、また離情去りがたきものあり。

木曾路の秋すでに秋雲深く、山寒し。すなはち東西に別るとて

誰か身とも知らず別れむ木曾の秋



長壽と粗食

厚生省鍛錬課

出口林次郎

わが國の國民體育は元來きはめて優秀であつた。従つて世界にも珍しい長壽國であつたとみられるのである。このことはただに古來から傳はる武器の類をみても明かなことである。またわが國は昔から簡素の美を尚ぶところ、に他國と違ふ大きな特色があつた。この國民が長壽を保つたところのわけも亦美衣美食のもたらしたものではなかつた。

例へば天文十八年に、わが國を訪れたイスパニヤの宣教師ザビエルの記した紀行文の中に次のやうな句がある。

「この國人は身長大にして強健快活、禮儀正しく、實錢射行し、武術を練り、寒暑飢渴に耐へ、勤務に倦まず。玄米を常食とし、牛

馬羊豚を食せず、席上着衣のまゝ臥して非常の備へをなす等、まことに世界無比の理想人なり……」

天文十八年といへば徳川家康が駿府に質となつた年で、謙信、信玄の兩將は健在であり、その後九年經つてから川中島の合戦があつた。また信長がぐんぐん頭をもち上げ始めた頃であつた。當時の武士たちの生活はまさに、この紀行文通りであつたに相違ない。いまから三百九十餘年前のことである。

秦の始皇帝が國民を統一し、奢に長じて美食にふけつた。そのため病におかされることとなり、始皇帝最後の念願たる不老長壽の靈藥を求めるべく使ひをわが國に派したといふ

記録がある。臣の除福といふ者が靈藥を求めてはるばるわが國の紀州に來つたが、彼は自分の使命を忘れてそのまゝ土着してしまつた。彼にとつては離れられない樂土であつたのであらう。

愛媛縣東宇和郡佐津村といへば毎年壯丁の合格率がよいので全國でも優良村に數へられてゐる所である。この村は男子ばかりでなく女子も仲々立派であつて、身長最低が五尺二寸、體重の最低が十四貫といふ見事である。しかも病人といふものが殆んど見られない。

それにも拘らず皮肉なことは、この村は縣下に於ける隨一の粗食村であるといふ事である。健康と食餌、かうした點もまた當然再検討する必要があると思ふ。

人間の胃は一定分以上を攝收することを許さないことは當り前のことなのに、舌の方で胃に過重な負擔を課してしまふ。胃の消化能力に數倍の作用を強制する結果、胃が弱つてしまふ。腹八部にしておけないところに美味

の缺點がある。

舌の嗜好は胃の方の食欲と必ずしも一致しないのである。日本には胃腸患者が非常に多いといはれてゐるが、このために現下重要部門たる生産力、経済力にどの位大きな悪影響を與へてゐるかはかり知れない。従來の食味は、大多數の人をして活きるための食物にかへつて害を受けしめ、壽命を縮させてゐるといふ矛盾があつた。

近頃各所で食作法が勵行されてゐるのは、まことに結構である。食作法の句の中に「正しく良薬を事として形苦を濟ふ事を取る。道業を成ぜんが爲にして世報は意に非ず」とある。

つまり食事は飢渴を除くがための良薬としてとるのである。従つて當然、これは美味しいの、まづいといった問題は出て來ない筈である。

またかうして食事をするわけは善根を成就し、而して更に廣く衆生を濟度しようといふ目的を以て、己が壽命を保つものであるといふのである。

ふのである。

この心掛けが今まで缺けてゐたので美食のために身を害す者が多かつたのである。

粗食主義は、國民精神に大なる影響を與へる。即ち粗食によつて生ずる利益には、剛健なる身體を作り、忍耐力を涵養し、困苦缺乏に堪へ、克く朔風凜々たる曠野を跋渉し、炎熱やぐが如き盛夏の太陽下を驅馳する精神と肉體とを備へしめるのである。剛健な身體こそ總ての基である。

歌壇

岩野喜久代筆



東京都 鈴木 修吉

國こそぞ大みいさやかすかな
我れと云へどもおろそかな
評 聖職に遇進する時國民の一人
一人が實に重要な役目を負
した作品である。草莽の微臣
と云へどもその任務の重いと
大官重臣に劣らない

大分縣 西川 和子

先生は、盲ひの兵になりぬると交
來ぬ我れはただ泣きに泣く
評 師事した先生が出征された
武運長久を祈つてゐる時に突
如傷病の報を受けた、しかも
それは盲目の因である故へ子
たちは慟哭した。作者はまだ
十三、四の少女であるだけ純
情率直に泣いてゐる

北海道 中村 もん

勝ちぬかむ爲の力ぞ老刀自も
ソベを穿きて士運びます
評 幼年を召したあのお婆さん
をモンベをはいでもつにかつ
ぎを一生懸命にあらわさる
若い私たちが力一ぱい働かな
いであられやうさあみんな
揃つてうんとがんばりませう

東京都 押野 尚秀

アツツ島忠魂猶も止まりて敵亞
米利加に挑みてあらむ
京都市 松村市三郎

還り來て翌日土を耕すと戦友の
便りのたのもしきかな
京都府 川端 俊雄

涙ただ流れてやまず皇恩の厚き
を念ふ病兵われは
大分縣 梅田 徳禮

限りある我身を捨てて限りなき
一億人を生かす人かな
東京都 上野 昌子

ますらをの赤き心ときそひつつ
征きます庭にカナナ燃えけり
高崎市 大塚 光高

耳遠くなりしに父にはらからが
聲高むるは悲しかりけり
兵庫縣 辻垣彌太郎

元帥のみ魂をわれら受つて伏
なす國を撃たずば止まじ
北海道 花田 順往

天つ日のみしるし高し雲の上に
たたかひ勝てる我が機嫌かな
朝鮮 三浦砂千子

みいくさのつづく限りは生きぬ
きて敵ほろぼさむ百年ふるも
投稿は官製ハガキで編輯部敬應係宛



風 光 明 媚

設 建 と 闘 戦

三 邦 湊 員班道報軍海

土耳其帽のやうな形の、黒い帽子をかぶり、赤や青の縞のあるシャツを着て、半ズボンをはき、これも青や赤の派手な縞模様のある布片を肩からかけてゐたり、腰に巻いてゐたりするのが異様であつた。

土耳其帽のやうな形の帽子は、インドネシヤ人が信仰してゐる回教からきてゐるソンコ帽であり、肩からかけたり腰へ巻いてゐたりする布片は、サロン

といはれて、寒冷を覺えれば外套になり、買物をすれば風呂敷

になり、水浴した時には、手拭の代りにもなる、誠に便利で、インドネシヤ人にとつては

必要缺くべからざるものとは後で知つたが、初見參の印象は、極めて異様なものであつた。

しかし、ヒリツピン群島のダバオ市附近に棲んでゐる比島人に較べると、インドネシヤ

人は從順で心から日本軍を歓迎してゐると聞いてゐたが、今見る、インドネシヤ人は、帽子をとつて禮をしてゐる顔に、ダバオ市で見た比島人のやうな心を隠しておど／＼してゐる色が微塵も浮んではゐなかつた。

機織を上つた邊からの海岸には、日本でいふ掛け出し小屋のやうに、壁を白く塗つた家が海の上にならんでゐて、海水浴場のやうな感じである。

熱帯樹の密生してゐる丘の根を廻つて行く

と、海の中にも、磯にも、鐵條網が幾重にも張り廻してあるのが見えてきた。

それに自然の岩のやうに見せかけたトーチカがあり、敵前上陸の舟艇に備へた防材が點々と頭だけを海面に見せてゐた。

日本の朝顔に似た花をつけてゐる蔓草や、コスモスに似た花や、月見草に似た花などが美しく咲いてゐる海岸に、不気味なトーチカ

や鐵條網や防材などがあるのを見てゐると、昭和十三年の秋、南支方面海軍に従軍して占領後聞もない廈門島へ上陸した時のことが思

機織を上つて、熱帯樹がこんもりと繁つてゐる丘の下の方海岸通を右へ行くと、自轉車に乗つたり、歩いてゐたりするインドネシヤ人に頻りに出逢ふ。

髪の手も黒く、顔も黒く、身體も黒いのが

た。

ひだされた。

榕樹が繁り、龍舌蘭が密生して黄色い花を咲かせてゐた、厦門島包頭海岸の風景は長閑であつたが、紅い珊瑚礁の磯へ下りると、

わが海軍陸戦隊の決死破壊班が数ヶ處を切斷した鐵條網の残骸があり海中には亂杭齒のやうに防材が立つてゐて、それは引つかかつた者を壓殺しにするやう、彎曲してゐる海岸に二基のトーチカがあつて、左右から睨んでゐた。

風光明媚と形容できるやうな海岸に、殺戮の武器が据つてゐるのを眺め、血腥い戦鬨の跡を辿つて歩いた印象は、容易な頭腦から消えないものである。

破壊戦術

パリツクパパンの海岸には、靜かに波が寄せてゐて、緑の小島も近くにある。

松に似た樹の間は粗末ではあるが、色彩や形の瀟灑なオランダ人の住宅が見え隠れしてゐて、瀬戸内海の避暑地でも歩いてゐるやう

な氣持がしてくる。

棧橋から約〇キロ歩いた頃、もとはオランダの石油會社B・P・Mの社員俱樂部であつたといふ建物の前へ出た。

わが軍に占領されて、今は〇〇になつてゐる、その建物は、廣い舞踏場や豪華な社交室などを持つてをり外廊には、丸卓子と藤椅子が配つてあり、緑の芝生の庭には屋外舞踏場までできてゐて、眼を閉ぢないでも、われわれの眼前にB・P・Mの社員たちが美しく着飾つた女たちを擁して躍る姿が見えてきた。

〇〇部隊本部へ行つてパリツクパパン上陸の挨拶と占領後の状況を聞くために刺を通じて、Y副官が防暑服で現れて、率直に状況を説明してくれる。

それによると、油の町パリツクパパンは徹底的に破壊されたといふ一語に盡きるらしい。

オランダは、數年前から、今日あるを豫期して、將校に統率される破壊班をつくり、破壊戦術を研究し、風雲急を告げてきた頃、既

に商船數十隻で婦女子の引揚げをしてB・P・Mで働いてゐた非戦闘員は、密林に蔽はれてゐる奥地バタンバルの巨木を伐り拓いて避難所をつくり、メナド部落、支那人部落などと出稼ぎにきてゐる者の出身地名をとつた部落をこしらへて、そこに收容し、パリツクパパンに残つたのは軍人と附近に住んでゐる原住民だけであつたといふ。

そしてタンクのごときも、内部は爆發藥を仕掛け、外に地雷を埋めパリツクパパンの海岸からマンガル飛行場までの海岸には鐵條網を張り廻し、海中には防材を立て、要處々々にはトーチカを構築し、港内は機雷で閉塞して、日本軍の上陸に備へてゐた。

だから、昭和十七年一月十一日の未明に、わが海軍が蘭領ボルネオのタラカン島攻略を開始すると、敵は時を移さず、サンガサンガ油田、スンボヤ油田地帯の破壊、陸上をパリツクパパンへ走つてゐる原油の輸送管を幾ヶ處となく切斷する。パリツクパパンでは山頂、山麓、海岸などにならんでゐたタンク群

の破壊から、製油所の破壊、港の海岸や製油所の構内に山と積んでゐたドラム罐に放火する。

棧橋には、ドラム罐を運んで、それに火を點けて鐵がとろけるくらゐに燒き、それでも足りないで、バリツクバパンの海岸に沿つてゐた支那華僑の商店街は、奪略した後で、火の海にしてしまつた。

サンガサンガ、スンボヤ油田地帯の井戸の破壊よりは徹底的で、ポンプの釣機を落す。原動機はエンジンシリンダを破壊する。機械といふ機械の樞要部は悉く破壊してゐた。

魚 雷 跡

タラカンを完全に占領した、わが海軍のボルネオ攻略部隊が、陸軍の精銳と協力して、一月二十四日の未明に、バリツクバパンへやつてくると、陸上にあつた兵舎、砲臺も、航空砲臺も、抵抗しないで、バリツクバパンを油地獄、燒け野原にしたまゝ逃げてしまひ、

僅に港内にゐた二隻の驅逐艦と、マンガル沖に潜水して待ち受けてゐた潜水艦と、ジャワ方面から飛來したボーイング双發の爆撃機とが、わが艦艇と交戦し、輸送船團を脅やかしただけで、激しい戦闘はなかつた。

ただ、この時、敵潜水艦は艦種の識別など度外視して、吃水二メートルの〇〇艇であらうと、何であらうと、盲目滅法に魚雷を發射してきた。

ある〇〇艇のごときも、主計兵が煮炊所の掃除に海水を汲み上げてゐると、眼の前を魚雷跡が通つた。

ハツとなつて顔をあげてると、敵潜水艦の潜望鏡が海面に見えた。

主計兵は狼狽せず騒がず、海水を汲み上げて置いて、敵潜水艦は、飽迄、氣付かずにゐるやうに見せかけながら、素早く、上官に報告、忽ち攻撃を開始して、撃沈してしまつたといふことである。

『原住民が心から、わが軍に協力してくれるのが有難いですよ。』

Y副官はふと嬉しげに眼を輝かしていつた。

『明日は、この附近一帯のサルタンが揃つて挨拶にくるといふし、その後で皇軍歓迎會を開いて、天皇陛下に敬意を表したいといつてきてゐる。海上から八十哩遡つたところ、ワケイ河畔にある州の首府サマリンドの上流テンガロンにゐるサルタンは、神武天皇祭に家々に國旗を掲げさせ、附近に木材が豊富なので、それを伐つて出すが、何處へ運んだら、日本軍の役に立つかと問ひ合はせてくるほどで、原住民は皇軍を信頼してゐるから、テロ行爲など全然ない。』

Y副官の言葉がしん／＼と身に沁みて、身顫ひに似た感激が涌き立つてくる。

世界の寶庫、東印度諸島に棲む原住民の、皇軍への心からの協力は、占領後に勞苦が付き纏つてゐる支那と較べて、何といふ明朗な姿であらう。

『この間も、リコ河の支流を五時間ばかり遡つたところの原住民が、カヌーで下つて



高僧一口説法

佛教と神な
がらの精神

岩井 智海

釋迦三尊といふ佛畫には、文珠は劍を握つて獅子の上に乗り、普賢は蓮の花を持つて象の上に乘つてゐる。これは何を表示したものと云ふと、文珠の劍は一刀兩斷に物を斷ち切る勇ましいものである。これに反して蓮の花はそよ吹く風にも落ちるといふ優しいものである。勇あつて剛に流れず、仁あつて弱きに溺れず、その中心の舵を取つて勇ましき中に優しき心あり、劍の心と蓮の心が圓満に働いてゐる所が、即ち釋尊のお悟りの智慧の光りである。

又大獅子は獅子奮迅の勢ひ千難屈せず萬難撓まず、一旦これが正しいといふ事が分つた以上は、目的達せざれば後には退かぬといふ

非常な勇往邁進の大精神を表すが、これに反して象は背中に子供を乗せて遊ばすといふ極めてゆつたりとした廣々としてゐる心を持つてゐる。この象の精神を以て世界の一切の人の心を胸に抱く、大きな温かい廣々とした心を表はしてゐる。獅子の勢ひと象の堂々たる廣々心とを一つに備へてゐるのが釋迦の心であり、佛教の精神の光りである。

この劍の心、獅子の勢ひと、蓮の花の優しき心、象のやうな廣々心の二つを以て、わが帝國の神ながらの大精神たる御玉にこもれる仁、御劍にこもれる勇の心を鍛へ、釋尊のお悟りの光りを以て御鏡にこもれる智慧の光りを磨くならば、神ながらの精神を養ふよき要素となり、また事實佛教が如何にこの神ながらの精神を鍛へてきたかは火を睹るよりも明らかである。それは三百年來の日本の歴史の舞臺に上つた、英雄君子の信仰状態をみても疑ふところがない。岩井大僧正は前管長、昭和十七年五月二十四日遷化さる。

きて、オランダの敗殘兵が出て荒らすから、討伐したいと思ふが許可してもらへまいか——といつてきたので、許してやると、大數びで歸つて行つた。また、あるところでは、ダイヤ族と百名ばかりのオランダ敗殘兵との間に戦争がはじまつて、オランダ兵が、日本軍の救助を求めてきたこともある。

私たちは腹を抱へて笑つた。

日本軍に敗れて奥地へ逃げ込んで敵兵が、別の敵と戰つて、敵である筈の日本軍に救助を求めてくるなどは、滑稽とも何ともいへない珍妙さであるからだ。

『バリツクパバンは、敵の破壊戰術で、徹底的に壊されてゐたが、占領と同時に、復興作業を開始して、全力を擧げてゐる。戰禍を避けて逃げてゐたB・P・Mの製油工場で働いてゐた労働者も、ボツ／＼歸つてきてゐるし、まあ、大いにやりますよ。』

自信を湛えて綻びたY副官の顔に、戰闘と建設とが表裏となつて遂行されてゐる、大東亞戰爭の特異な性格を、私は見て取つた。

慈悲・無慈悲

佐藤賢順

部室の中を蟋蟀が飛び歩いてゐる。ここへ来てから季節が一巡りして、やがて二度目の秋を迎へる。夏を送り秋を迎へ、秋を送り冬を迎へ、冬を送り春を迎へ、春を送り夏を迎へた。かう書けば、何の變つたこともない、當り前のことであつたやうにも思へるが、新しい環境の中にゐて送り迎へる季節は、その時その時が珍らしく、その移り變りには深い注意が誘はれたものである。一年経つと、その土地についても、あらましの事は解つてくる。

見様見まねで、近所のお百姓のやり方を見たり、通りがかりの野良歸りの人に聞いたたり、畑作りも一通りはやつてみた。小松菜のおいたしを出されて、どうです、その蒔草は……と言はれれば、「結構ですね」などと言ひかねなかつたのであるが、とも角自分で作つてみて小松菜と蒔草との區別も解つた。朝の味噌汁に入れる小松菜の味が深くなるにつれてしみじみと味つた。秋には豌豆を蒔き蠶豆を蒔き、玉葱の苗を植ゑた。畑作りの面白さといふものは底知れないとでも言はふか、病膏肓に入つて、あれもこれもやつてみたくなつて、春になると、馬鈴薯を蒔きトマトや茄子の苗を求めて植ゑ、いんげんを蒔き玉蜀黍を蒔き大根を蒔き、近くの農家から分けて貰つて甘藷の苗まで植ゑ込んだ。トマトは苗を植ゑた他に種からもやつてみた。

南瓜は全部種から始めた。私の觀察は、かうして、詳細精致を極めた。僅かに一年ではあるが、甚だ親しく自然と交り、そのふところにいよいよ深く抱かれてゆくやうな氣がした。

大根を除いては收穫も相當なもので、この夏は學校の休み中を、東京から來てゐた子供達が、大變に重寶した位であつた。

幾何かの收穫が得られるたびに、今更のやうに自然の恩恵の限りなさを思ひ、陽の光を佛光として仰ぎ、露をも雨をも風をも慈悲として頂くのであつた。八十幾つかになつて、まだ鑿鑿として毎日畑に鋤を振つてゐる近くの老農が、よく出来る年には誰が作つてもよく出来ますよ。上手下手はない。お天道様のお蔭でさね」と述懐して、陽を仰いでゐたが、恐らくこれは老農八十幾年の經驗の結論であらう。農業上の色々の技術に上手下手はあらうが、そんなことは自然の恩恵をどう變ずることもできるものではない。

馬鈴薯を掘り上げて、土の中から拳ほどの

埃^こがもくもくと出てきた時などは、初めて見る珍らしいことではあり、これほどの實^{じつ}があらうとは豫期^{よき}しなかつたことではあり、思はず歡聲^{かんせい}をあげた。誠に大いなる恵みであり大慈大悲^{だいじだいひ}であつた。

× × ×

私^{わが}どもは、然し、やがてこの恵みに慣れてしまふ。この大いなる恵みを當り前のこととして、少しも珍らしがらなくなつてしまふ。自然^{しぜん}は常に慈悲^{じひ}深いものであると決めてしまふ。

私もいつの間にか自然^{しぜん}の慈悲^{じひ}に慣れ、畑^{はたけ}のものは放つてをいても自然^{しぜん}に出来るものだ位、にしか考へないやうになつた。

春^{はる}も闌^{はら}となつて、草木^{くもく}の伸びるのが一日と目に見える頃であつた。誰れも彼れも生育^{せいよく}してゆく草木^{くもく}の激しい息吹を感じ、蕭然^{しょうぜん}たる新緑^{しんりく}の勢^{いきり}に壓倒^{おつた}されるやうな氣持になる頃であつた。私は暫くの間の草廬^{そうろう}を空けて東京^{とうきょう}に歸つた。もうトマトの手も作つてやらればならぬし、豌豆^{とう豆}もすつかり實つたので、

倒れぬやうにもつとしつかり支柱を立ててやらねばならぬが、陽氣も例年より冷いし、四^よ五^ご日は大丈夫であらう、歸つてからにしようと思つた。勝手な獨り決めをして數日を留守にした。その間に、風と雨で豌豆は地に伏して水浸しとなり豆は殆んど腐つてしまつたし、トマトは枝葉が亂れそを摘む時期が遅れてしまつてゐた。

歸つてきてこの有様を見て、しまつたと思つたがもう間に合はなかつた。

自然^{しぜん}の動きには聊かの滞りもない。氣候が不順だから今年^{ことし}は初夏^{しゅな}の訪れが遅れるであらう、などと多寡^{たさ}を括つてゐる間に、自然は少しの休みもなしに刻々に進んでゐた。自然は人間の身勝手な怠慢^{たいまん}など一日も容赦^{ようしや}しない。それは峻烈^{じゅんれつ}である。寧ろ苛酷^{かこく}でさへもある。

これは自然^{しぜん}の無慈悲^{むじひ}とでも言はふか。自分勝手な計ひから、自然に隨はずにこれに背く者には、遠慮^{えんよ}なく苛酷^{かこく}な答を加へる。

自然^{しぜん}の懷^{ふところ}の暖かさをばかり知つてゐた私

は、或る時、かうして自然^{しぜん}の冷たさを知つた。お慈悲に慣れてばかりゐるよりは、時として、無慈悲^{むじひ}を知つて峻嚴^{じゅんげん}に打たれることの方が、一層深く自然を知つたことであるのに違ひない。

お百姓などは明け暮れに自然と共に居るのであるから、この無慈悲を百も二百も承知してゐるのであらう。農の尊い所も一つはここにあるのではないか。知らず識らずの間に、自然に隨ふといふ深い心持が養はれてくるのである。

けれども慈悲といひ無慈悲といふが、これが又、私ども人間の心持を基にして忖度^{そんたく}することなどはとうてい出来ない途方もなく大きな慈悲^{じひ}、無慈悲である。

そんな言葉で現すことが却つてそれを小さな浅いものにしてしまふかと思はれるほどに深いものである。

かう知れば自然^{しぜん}のふところの涯^{はた}しなさが、いよいよ明かになつてくる。



事 實
奇 談
鼠と蛇の闘ひ

村 瀬 秀 雄

裏山から吹き込んでくる風が涼しかった。すぐ庭先から山へ續く蜜柑畑のくろぐろとした葉が風にゆれる音を聞きながら、私は久しぶりに訪ねてくれた友人の奥さんと、蜜柑のこと等を話してゐた。この奥さんは戦地にある友人の留守を守つて毎日勤めに出てゐる身なので、休を利用しはるばる来てくれたのであつた。隣りの部屋からはとき／＼子供たち

の寝息が聞えてきた。八つと六つになるこの子供たちはまるまる肥えて、これならお父さんのあとをついで大丈夫立派な兵隊さんになれる、現地の友人も心丈夫に喜んでゐるだらうと思つた。その代り悪戯の方も可成りの方で、殊に兄の方は私の顔をみるなり、「をちさんところへ綱がない」と、もう蜻蛉をとるつもりなのだらう家にあがらうとしなかつた。それに較べれば、弟の方は餘程温和しく、蟬の脱殻を幾つも集めては嬉しがつてゐた。とにかく二人ともこうした田舎の寺が餘程珍しさに違ひなかつた。子供たちは終日走り廻つて疲れたのであらう夜食がすむとすぐ睡くなり、明日は濱に行くのだと相談してゐたかと思ふと、間もなく軽い鼾をかいてゐた。

私はもうそろ／＼奥さんにもやすんでもらうかなと考へてゐた。丁度その時、ドスンと天井から何か私のすぐ後に落ちたものがあつた。思はず振向いた私の目に、大きな鼠が一匹簞笥のかげにゴソゴソかくれて行くのが見えた。何んだ鼠の奴、何處から落ちたのかと見上げると、なるほど天井に一つ手頃な穴が開いてゐて、そこから落ちたことは判つたが、それと同時に鴨居のながしに可成り大きな蛇が悠々と鎌首をあげてゐるのに氣がついた。私も驚いたが、奥さんは尚のこと顔色まで變へてゐた。田舎のこととて蛇は珍しくはないが、奥さんの前だけに何んとかしなればならぬと思つた。

おそらく青大将が鼠を抱えて穴から落ちて

鼠に逃げられ、自分は鴨居にひつかかつたのであらう。鴨居といつても本堂のことであるから、畳からは一丈の高さがあり、天井の穴へは更に三尺はある。だから下りられはしない代りに天井へ歸れさうもない。私は大聲で竹竿を……とどなつた。

こうして私達が騒いでみると、おかしなことにさつき一旦姿をかくした鼠が、ヒツコリ同じ鴨居の上に現れた。しかもその鼠が蛇のある方へノコノコ歩いてゆくのに私は二度びつくりしてしまつた。鼠がこの明い部屋で目の前にある蛇に氣のつかぬ筈もないし、今しがたまさに吞まれかゝつた當の蛇である。鼠は細心で臆病だし、逃げることしか知らぬくせに今度は逆に蛇に向つてゆくではないか。私は不思議でならなかつた。一方蛇の方では性懲りもなく再びやつてきたので、長い舌を出しながら今にも飛びかゝらうと待ちかまへてゐる。

私は電燈の笠をもつて蛇の方に向け急いで照らしてやつた。尙一層鼠に蛇がよく見える

やうにしてやるつもりである。ところが私のこうした心配には一向頓着なく、鼠の様子は蛇を恐れる所がない。



鼠の様に蛇を恐れる所がない。ますく蛇に近づいては、一寸退き、また近くよつてゆく私は鼠の大膽さに我慢が出来ずシと力をこめて追つてみた。するともとときた方へ一度は逃げて、私がホツとしたと思ふと

すぐにまた姿を現して蛇に向つてゆく。その

著 法 靈 林 ・ 序 匡 康 辨 辨 尾 村 椎 中

法然上人を憶ふ (本會で取次す)

所 込 申

法 然 上 人 鑽 仰 會

著者は思想上に懷疑懐惱を續け、遂に凡入報土に救はれた體驗を通し、告白と懺悔の内に法然上人の教義をつゝつた。

B 判四四〇頁
實費三圓(送料共)

振替東京都芝区芝公園四八二番七
東京芝公園四八二番七
振替東京都芝区芝公園四八二番七
東京芝公園四八二番七
振替東京都芝区芝公園四八二番七
東京芝公園四八二番七

うちに竹竿が運ばれてきたものの、この竹竿は鼠の方を追ひ拂ふのに振り廻されなければならなかつた。「あれはきつと、蛇に見込まれてゐるんですよ。だから足が自然と蛇の方にゆくですわ」と、隣室の敷居に立ちはだかつた奥さんが云つた。何んにしても私たちを嘲けるやうに、待ちかまへてゐる蛇の前へ突き進む勇敢？ な鼠をだまつて見てゐることは出来なかつた。

片方の欄間には紅葉をたいて酒を温めてゐる白丁が描かれ、他方には獨り鼓を持つて舟に乗り、月をめぐる上臈が、色もあでやかにかいてある。こうした風景を背景に、あかあかと電燈に照らされながら、奇怪なる蛇と鼠とが對立してゐる、世にも不思議な闘争が演ぜられてゐるのであつた。どう苦心しても制止出来ない、今にも目前に實現しさうな修羅と地獄繪を豫想して、私はすっかり落つきを失つてしまつた。

騒ぎが段々大きくなつて、寺内の老爺さんが「蛇ですつて」といひながら吞氣さうな顔

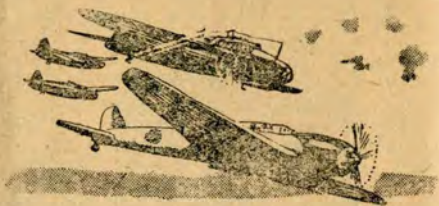
をしなげらやつてきた。彼は至極落ちついてゐるだけあつて、腕前の方も大したものであつた。鼠との一件を知らぬので私たちの様子がおかしかつたかも知れない。とに角鴨居に梯子をかけて蛇をつまみ出してしまつた。彼が手を高くあげないで尾が疊につきさうになる所からして、近頃珍しい大きな青大将であつたわけである。

「高い方に捨てないと、また來るといひますからね、裏山に放つてきましたよ。それにながしの裏にまだ何かゐるらしいのですが」

といひながら人の好い老爺さんが、また梯子にのぼつて調べてくれた。私たちはやれやれといふ氣持で黙つてみると、彼は汚いくずを次々に掴み出してゐた。そして最後にはらこんなものが、と云ひながら差し出す彼の手をみて驚いた。彼の手には小鼠が二匹もぶらさがつてゐたからである。私はハツとした。やつぱりさうだつたのか、鼠が蛇に齒向つて氣が狂つたやうに見えたのは、矢張り鼠のゐる自分の巢が心配だつたからに相違な

い。わが子可愛さの餘り、己が子孫のために敵はぬと知りつゝ蛇に向つて行つたのであらう。親の愛は盲目だといふ。盲目だけに己が生命の危険については少しも省みないのである。雉が自分は焼け死んでも子を守るのと同じことである。子のために初めから死を賭してゐるのである。すつかり睡氣をさましてしまつた奥さんが座り直して思はず嘆聲をもらした。「親の愛は莊嚴ですわ」と。

先刻までは夫たる友人から「戦死の報らせがない内は、手紙がゆかずとも元氣で御泰公してゐると思つてくれ」との文面を受け取り、筆無精が過ぎると不滿らしかつたのに、今はお國のために戦ふ夫の姿が、矢張り私達銃後のために日夜艱難辛苦してゐるのだと判つたらしかつた。大にはお國のため、大東亞のために戦つてゐるのである。敵を倒さねばこちらが倒れる、戦争は是が非でもわが國が勝つのである。このやうに奥さんの腹の中は決つたのであらう。黙つてゐる口もとがふるへ、眼には涙があつた。(齋藤清書)



子らよ

行け、おほぞら 大空へ

小林 岩太郎

三男の浩は小

学校を出る頃ま

ではそれ程目立

つ子ではなかつたが、中學へ入つてからめき

く、骨格もたくましくなり、學業の成績も上

つて來た。そしてその頃から飛行將校になる

のだと云ふ志望を口にするやうになつた。流

石に母親は子供のことを案じて、「どうした

ものだらうか」と時折父親たる私に相談をも

ちかけるやうになつた。が、私は子に對して

は眞直ぐな道さへ示めておいたら、子供達は

自分で自分の道は撰擇して誤ることはあるま

いと信じてゐるから、母親にはその様に返事

をすることにしてゐた。

私は男三人、女五人、八人の子持ちである。

多いと云ふ人もあるが、私はそれ程多い子持

ちとは思はない。私共夫婦が一生子供らのた

めの土臺にならうと決心をし、それをまた慰

めとして勵いてゐる以上、道を誤らない限り

子供らの自ら選んだ道に信頼してやるのが一

番である。

大東亞戦争が勃發し宣戰の御詔勅が下され

たのは浩が中學三年の時である。この時以來

浩の皇軍の荒鷲の一員として米英撃滅のため

に大空をかけり度いと云ふ決意は動かし難い

ものとなつてしまつた。浩が先づ第一に兵學

校を志望した時に、私は喜んで承諾を與へ

た。浩は熱心に勉強した。また身體を作らな

ければならないと云つて、自分で庭に鐵棒を

作ることを始めた。そして家中のものがそれ

に協力した。男の兄弟達は鐵の棒を何處から

か捜してきたり、木を組んだり、柱をたてる

穴を掘つたりしてどてややら機械體操の出来る

やうな鐵棒を作り上げてやつた。家中のもの

が浩が支障なく勉強の出来るやうにと夜おそ

くまで教科書と取組んでゐる彼のために細心

の注意を拂つてゐるのを見て私は肉親のこの

美しい協力を感謝し、激勵の言葉をかけてや

つた。然しそれ以上のことには何も干渉しな

いことにし、母親にもそう申付けておいた。

新しい時代の子供たちは、彼らの爲すべきこ

と、彼らの行くべき道を、刻々に前進する環

境の中から、われわれ老人よりも、より豊富

に感受し、もつと立派に組立て、潑刺たる生

活力を以て斷乎として行ふだらうと云ふこと

を信じてゐたから。

浩は日數の少ない子であつたが、信じてよ

しと思ふことはきつぱりとやつてのける子であつた。彼はこの兵學校の受験のために全力を盡した。然しこの戦ひは遂に敗れた。身體検査は通り、學課試験も最後まで進んだがつひに入學通知に接しなかつた。通知を待つてゐるこの子の希望にみちた、だが悄悄にやつれたやうな顔を見て、私も身を切られるやうな思ひであつた。然し、この志望に敗れたときまつた時、彼は落膽することなく、初志を變えずことなく第二の道を選んだ。それは甲種飛行豫科練習生への道である。このためにまた火の出るやうな鍛錬と勉強の日がつづけられた。

その中に次男が物理學校を卒業して、入營した。この時は家から出した最初の兵隊だと、この名譽のために親類中が集まつて壯な壯行會をやつた。席上次男は立派な挨拶をして、國家非常の際男子たるものこれ以上の本懐はない、粉骨碎身、國と家の名譽のために全力を擧げて戦はう、弟もつづけ、兄もつづけと叫んだ。私たち夫婦はこれ程に成長

してゐる子供の横顔を見ながら何とはなしに涙ぐんだのであつた。その時浩は「兄貴は地上を進め、俺は空から敵の奴らに爆彈をお見舞ひ申すぞ」と云つて笑つた。

子供たちはこゝまでずん／＼進んで来た。

彼は既に獨り歩きをしようとしてゐる。既に獨立した意志を持ち、確然たる信念を礎き上げてゐる。彼らは時代の意識を豊富に汲みとり、國家の運命に對して最大の關心を持ち、その運命に對して一身を捧げようと云ふ決意には微塵の揺ぎもない。何人がこれを抑止することが出来よう。私たちが兩親もまた子らの正しき成長を護り祈るばかりである。

丁度次男が甲幹に合格したと云ふ通知をよこした前後に、浩の待ちにまつた甲種豫科練習合格の通知が来た。この時の浩の得意と喜びとは絶頂にあつた。たゞ子の將來を盲目的に案じつづけてをつた母親もこの時は涙を流して喜んだ。父親としての私の喜びもまた大きなものであつた。

子らは私共夫婦の延長である。生命の繼續である。私共の肉體は再び子らと共に生長する。私共の世代が終らうとする時に、子らは再び國家と社會との運命を背負ひ、それを生長せしめつゝ、それと共に生長する。われわれが志して成し得なかつた多くのことを子らはなし遂げるであらう。海行かば水づくかばね、山ゆかば草むすかばね、大東亜共榮圏の建設と云ふ懐古の大業に一身を獻げ、銃をとり、天かけて、敵米英に鐵槌を加へる。これ日本男子としての快事である。私どもがこのまゝ目をつむるとも子らはこの快事を大模威の下、必ず爲し遂げるであらう。人の親としてこんな喜ばしいことはない。——私は浩と大ききも深きも同じ感激にひたることが出来たのである。

浩は入營の日が近づくに従つて、次々と一身上の事を處理し始めた。何時如何なることがあつても心残りのないやうにとの心使ひはまた私ども夫婦を涙ぐましめた。身の邊りの品々をとり片付け、たづねるべき親戚のもと

を廻り、そして辭世にも似た歌をさへ認めて
残した。

私ども一家に二度目の壯行會が開かれた。

浩は初めて飲んだ酒に上氣した顔をかゝやが
して一同がびつくりするやうな大聲を張り擧
げて辭世の歌だと云つて次のやうに歌つた。

天かけり御櫓と散らん若櫻、日本男子わ
れ今ぞ征く

私ども夫婦は勿論、列席の兄弟親戚、友人
も思はずまぶたが熱くなつた。

かくて子らは進んで行く。浩と共に幾千、
幾萬幾十萬の子らが進んで行く。何人も埋止
めることの出来ない大行進である。實に世紀
の大行進、興亜の大行進、日本民族の大行進
である。

如何なる親がこの時に當つて、子らを單に
自分の子なりと主張することが出来るよう。こ
の時にこそ子は國家の子であり、まことにお
ほみだからであることを明かにする。私はこ
の時の感激を今でも持ち續けてゐる。

浩は無事入隊し、猛訓練を受けてゐる。私

は入隊してから一度
も面會に參らぬ。長

男は二三度逢つて來

たが何時も訓練と第

一戦に立つ時の感激

を語るばかりで、家

庭のことなどは全く

氣にかけてゐないや

うであると云ふ。た

まによこす端書にも

元氣であると云ふこ

とが二三行書いてあ

るだけで、その都度

家内の者どもは顔を

見合せて笑ふばかり

である。

それで良い。家の

しとなぞに一切かま

けるな。子らよ進め
勝抜くまで進め、子
は國家の子である。

光圀と心越禪師

水戸光圀が己が歸依する心越禪

師の心臓を試さうと、ある日酒筵

を催して招いた。そして「何はな

くても先づ一獻」と光圀自身が酒

杯を取つて禪師にすゝめた。禪師

はこれを兩手に受け、小姓になみ

／＼注がせ、一禮して杯を口に

しようとする、かねての計畫通

り、轟然一發、ズドンと酒筵の

床下から大砲が打ち出された。あ

まりの音にこのことをかねて承知

してゐた小姓たちさへ、びつくり

して銚子を抛り出してしまつた位

であつた。しかし禪師は騰々と立

ちのぼる硝煙の中にあつて、泰然

自若として杯の酒に小波一つ起
すことなく飲みほしてしまつた。

光圀が「御無禮仕つた」と挨拶

すると、禪師は「いや、砲聲は

武門のたしなみ、別に御書酌には

及び申さぬ」と一向意に介さぬ様

子であつた。

やがて返杯となり、光圀がなみ

／＼と注がれた酒杯を手にして飲

まうとすると、その刹那、青天の

霹靂のやうに「喝ツ」と一聲、さ

すがの光圀も驚いて杯を取り落

してしまつた。

禪師は平然と涼しい顔で、「イヤ

もう、喝棒は禪門の常でござれ

ば、別に斟酌はいたし申さぬ」と

いつた。試さうとした光圀が返つ

て美事試されてしまつたわけであ

る。

筆隨教宗



とんちん

糸山天真文

物語
ノン坊畫

燈火親しむ可きの秋、豚珍は雑誌帳にゴム消しては書き、書いては消し、學校の復習に餘念が有りません。

小さい机に向つてゐる豚珍に寄り添ふ様に老師はさも親しげに『今年の夏休みは、他の子の様に、海に山に連れてつてやる者が居なかつた豚珍をワシは可哀想に思ふが、矯めるなら若木の内、お前の好むに任せておけばお前は悦ぶであらふ。何の打算も無しに子供の悦ぶを見て我が樂しみとするのは子を思ふ親心であらふが、それは眞に子を愛してゐる所以では無い、嚴しく訓へる、其處に眞の愛がある、分らずやの老師と思ふであらふが、大きくなつたら、きつと分つて呉れるであらふ、堪忍しな！』と哀れみを乞ふ様に云ふ老

師を思ふと、子供心に氣の毒になつて『登山や海水浴なんて、ちつとも羨ましくないや』と新しい元氣を取戻す豚珍です。

『それ、そのお前の聞き分けが良過るから、ワシヤ餘計いぢらしくなるんだよ、ええいと、今日は何も彼も棒にして、豚珍の喰べたいもの見たいもの、どつさり満足させて上げ様』と今云つた嚴しい愛の訓へも、すっかり忘れて仕舞つたかの様に、もう、いそいそと豚珍の手をとつて寺の門を下りて行く老師です。

秋日、悠々として出来、秋の風はそよよと心持良く、人の肌に沁み込むばかり、澄み渡りたる秋の空、一碧瑠璃の様です。

動物園の一角に現れた豚珍と老師、園内の茶店で購ふた動物の餌のパンを、自分達も好加減頼張り乍ら、象や猿に投げ入れて、年を忘れての無我の境、大人拾錢、子供半額五錢の入場料で一日出張らして貰えるのは、ほんとに廉いやと矢鱈に老師は感心し乍ら、其の足で淺草の觀音様へ御堂は參詣の人達で織る

が如く。御園引きの役僧は、格好も鮮かに、ガチャ／＼と箱を振つては、吉凶のお札を、並んでゐる人達に目にも止まらぬ速や業で渡してゐます。

佇んで拜む人あり、後の方で背のびして賽錢を投ぐる人あり、何と云ふて拜んでゐるのでせうか、夫々、眞劍な顔して拜むでおります。ゆらぐ法燈、翻經の雜談、混雜の中にも何となく莊嚴な感に打たれます。

手をつないで階段を、もまれ／＼降り乍ら老師は不圖、豚珍に私語きました。

『佛を拜む心は、跪くころ、跪く心は謙るころ、善人であると誇る人は、多くの人から敬まれず、却つて愚かであさし自分であるときめて跪く人が拜まれる、面白いもんだな、分るかな』

『え、知つてゐます 天皇陛下様を拜めば忠になり、お父さんやお母さんを拜めば孝となり、兄弟拜み合えば、兄弟喧嘩は無くなります、御互に、のゝしり合ひ傷つけ合ふ世界に、ほんとに幸福は來ないんですね』

『あれッ!! 生意氣な事を云ふね、何時の間にかワシの口癖迄真似て覚えてしまつたね、だがね拜む事は理窟ぢやない、實行する處に在るんだよ』と云ひ乍らも平素の老師のおしへをウロ覚えにも覚えてゐる豚珍をかへり見て老師は殊更たのもしい感じがするのです。

仲店を抜けてゆく戻り道に、赤い鉢巻きしただるまの繪のある料理屋の大きな看板見た老師『そ、こ、此處で玉子焼と天婦羅でも奢るかな』と、入りた相な顔して、こゝみ加減に豚珍の顔を覗き込んでゐます。

『僕は百貨店の食堂の方が好いな、だつて好きなもの見てから喰べられるんだもの』

『そうかくではそうし様』と、牛にひかれて善光寺詣と云ふわけで、三越本店の食堂に轉出、硝子越しに陳列棚の、よだれの垂れ相な喰べ物、飲み物に生き乍らの餓鬼の様にブラ下つてゐる人達の下をくぐり抜けて豚珍

は血眼で、選り出してゐます。老師は喰べ物の名前が、さつぱり分りませんので、豚珍に『好きな物、遠慮なく注文しな』と後の方で額の汗をぬぐひ乍ら待つてゐます。

『お待ち遠う様で御座います。散らし壽司、

とんちやん食前合掌の圖



チャーシエウメン、クリームパツフエーにアイスクリーム、ゆであづきに蜜豆』

『ありやく、よくも景氣よく、そう云つたもんだな、お腹の方は大丈夫かい』と心配相に流石の老師も飽きれ顔。

御馳走を目の前に並べられると、思はず嬉し相に、紅い頬べたに笑窪さへたゝえ、いきなり『戴きまゐーす』とあたり構はず大きな聲で云つて、掌を合して拜むが否やバクつきました。喰べ乍ら豚珍は不思議そうに老師に云ふのです。『老師も、前にゐる叔父さん(同じ卓子で喰べてる紳士)も喰べる時、どうして拜んで戴かないの?』と云はれて、老師は『ワシヤ負けた』と頭を掻き、目をほころばせました。同じ卓子についてゐた紳士は『恐縮です!! お子さんに、すつかり訓へられました』と云つて感深相に靜かに頭を下げました。『豚珍や、寺へ歸つたらな、他でこんな喰べたと云ふなよ、兄弟子の竹林が變な顔をするからな、』うん、云はないよ』迄は好かつたのですが、寺の玄關へ來ると大きな聲で豚珍が、『僕は老師と、お壽司や、チャーシエウメンや、クリームパツフエーや、アイスクリーム、蜜豆を喰べないよ』と云ひました。老師の心配した通り、竹林は遂に、名前に變竹林な顔して臆れました。(その四)

 談相仰信

信仰相談

(質問歡迎) 擔當中村辨康

病める者の悩み

(問)

私はまだ廿歳にならぬ者であります。三四年前から信

仰に志し色々と努力しました

が、到底法然上人様親鸞上人様のお心の萬分の一も體得出来まいと存じます。然し何とかして信仰の片端でも窺ひ得られ、ばと思ひ苦心して居りますもの、まだ何の獲得も出来ません。謂ゆる學者にはなれるが覺者にはなれない。結局信仰は高嶺の花でせうか。

杖とも柱とも頼む子供が不治の病を得て両親へ御恩返しも出来ず、逆に両親の心を苦しめて居ることは何としても堪へられません。私はあの「父母恩重經」を讀む毎に、何一つ御恩返しが出来ない自分が呪はしく思はれます。病める者と病める者の両親の生き方をお教へ下さい。皆これ前世の因縁なりと云ふの

では冷たい言ひ方ではないかと思ひます。

その宿因を乗り越すのが信仰の力ださうでございいますが、その信仰への道順をお教へ願ひます。

佛教は成長の家の如く信じて病がなほるものとするわけではありますまいが、と云つて仕方なしに無理に掄鉢的に諦めるのが不治病者への佛教の最高の教なのでせうか。或は「治つた」と心で考へ心の持ち方を變るのが關の山でせうか。病る者への淨土の教へをお聞かせ下さい。世間の親子件なつて楽しく生活して居るのを見ますと、理窟では駄目であります。

私は死が恐ろしいとは思ひませんが、阿彌陀様の御許へ參ることを嬉しいとは思はれず、矢張苦しみながらも生きて居たいので日夜苦悶をつづけて居ります。如何に生き、如何に考へたらよろしいでせうか。凡人愚者

としての信仰、然かもどん底に苦しめられて居る哀れな者の信仰をお聞きしたうございします。(小倉市・上到津本町・吉次成太郎)

(答)

何んな人でも自分の中には悲觀されることがあると共に樂觀されることもある筈であります。然し氣の弱い人は悲觀材料のみを見つめて、逆に樂觀してよいことには眼をつむつて居ります。是れでは全くやり切れないでせうし、死んでしまひたくもなるでせう。だがそれは誠につまらないことです。病氣して居る中にあつても喜びを感じるこ

と、これが一番大切であり、またその發見は必ず出来る筈であります。それはまた人に教はるよりも自分で感ずるやうに心掛けねばなりません。かなしみの中にも喜びを感じ、苦しみの中にも嬉しさを感じるのが本當の信仰人の態度です。若し「そんなことは百も承知して居る、それが出来ないからこそ聞くのだ」と仰しやるならば「唯だ念佛しなさい」と申し上げるより外に申すことはありません。



病める者も病まざる者も皆な均しく「念佛」するより外に方法はないのです。やつてやつてやり抜いてそれでもまだ喜びが見つからなかつたならば、その時こそあらたまつて聞くべきでせうが、萬々一にもそんなことはありません。必ず解決してしまひます。

信仰は決して高嶺の花ではありません。然し見て居るだけでは手に入れることは出来ません。求めよ。然らば與へられん。叩けよ。然らば開かれんです。學者にはなれるが覺者にはなれぬとは「聞いて知らう」とする人への諷めでありませう。私達は覺者になつてもいけません。信者となるべきです。愚者となることも覺者となるなど言ひたいです。

次に「父母恩重經」のことですが、之れは日本製のお經ださうです。誰が作つたのか、少しグロテスクです。先年高神氏が放逐したやうですが、サテ何んなものでせうか、少くともあなたを苦しめた

とすれば、むしろお讀みにならぬ方がよろしいと思ひます。

次に信仰への道順と云ふことですが、念佛より外に道順はありません。辨榮上人は十二光八正道七覺支等を以て説明して居られますが、それにしても一應の話だけであつて、根本は念佛です。念佛を離れて方法はないのです。

生長の家のことはよく存じませんが、あれは「雜誌や本を讀め、讀めばなほる」と言つて居たやうでした。ね。そしてその本には「病氣と思ふな」と云ふことが繰返されて居るのか承りました。讀んだことがないから嘘か本當か知りませんが、問題にするには及ばないと存じます。

色々迷はずに「念佛」で貫いて下さい。一切の理窟を抜きにして一心に念佛して下さい。

底に徹するまでやり抜くところに本物があるのであります。是れより外の方法は要するに枝末です。

お線香のあげ方

(問) お線香を一本、二本、三本等とあげ方に色々あります。が、何本が一番宜しいのでせうか。

しいのでせうか。

實は私どもの家では昔から澤山あげる習慣があり、十本位あげぬと氣がすまないのです。が、先日一本がほんとはであるといはれ少々迷つてゐます。

(青森縣東津輕郡鈴木洞光)

(答) お線香は一本でも二本でも三本でもよろしいですが、四本以上を一人で上げると云ふ根據はありません。

一本の時は一心を表し、二本の時は戒と定を表し、又は身と心とを表する意味に考へてもよろしいでせう。三本の時は身と口と心との三業を表するのであります。ですから四本以上上げることはありません。少ないと氣がすまないのは習慣上の感情ですから、それは直に馴れてしまひます。お迷ひになることもないでせう。



五重と授戒

(問) 五重相傳とか授戒とかは何う云ふ事かお教へ下さい。

また資格とか條件とか、手續などお教へ下さい。(京都・北大路・淨土愛讀者)

(答) 授戒は他宗にもありますが、五重は大體淨土宗だけ

であります。大正大學の石井教授の話に依ると、天台宗にも以前あるにはあつたが、それは恐らく淨土宗で制定した以後のものであらうとのことであります。現在は行はれて居ないやうです。一體「五重」と云ふものは一種の「信仰獲得法」であります。第一重は「反省」が中心で、第二重は淨土の教義をのべ、第三重はその教義の受取り方であり、第四重は教義に對する疑問の決答であり、第五重は正しく「信」の決定であります。之れは相傳なき人には語らない規定になつて居ります。一週間つめて修養するのですが、五重を受け

ない前にその内容を聞いてしまつては、謂ゆる耳學問になつて今度實際に聞き思ひ修める場合に効果が半減してその人の爲になりませんから禁じてあるのです。

之れを受けますには別段資格はありません。五重を修行する寺へ申込みばよろしく、授戒の場合も同じです。

次に淨土宗で行ふ授戒は五重相傳で信仰を得た人が、その信仰と道德生活とを念佛で決着せんとするもので、形は禪宗などのそれと同じやうでも、意義に於て格段の相違があるのであります。即ちお剃度の三歸戒と三聚淨戒と日課の念佛戒との三部構成になつて居るのが淨土の授戒で、三聚戒の實際上の困難を念佛で整理するのであります。無論授戒は授戒として單獨に成立しますけれども、五重相傳の色上げとしても非常に重要な意義を持つて居るのでありますから、五重を受けた人は更に授戒されば一層信仰が徹底するわけでありま。

この世の戀しさ

(問) 朝夕佛前で御念佛して居りましてアレコレと色々な妄想に心がみだれます

が「かく淺ましい私をもお見捨てなく御助けとは何たる幸福ぞ」と思ひつゝも、心の奥をよく探つて見ると、シツカリした何物かを握つた感じがせず、また極樂往生何だかよ、そこのやうに思はれ、御本願を聞けば天にも昇るやまな喜びがなければならぬのに嬉しくも思はれず、いつまでも生きて居たいのは、やつぱり心の底では「この穢土の世が戀しい故か」と矛盾して居る私の心が不安でございませう。どうぞ御教導下さいまし。

(京都市・園部・正木榮之輔)

(答) 法然上人にも同じやうな質問をした人があつて上人は「浮世のことは曠劫の昔から生きかはり死に更りやり馴れて來て居るから何うしても抜け切れないが、淨土往生のことはこの度初めて承つたことで、まだシミジミと感ずることが出来ないのは無理も



談相仰信

ない」と云ふ御返事をなさつて居られます。また歎異抄にも唯圖が親鸞上人に同じやうなことを質ねて居ります。

然し私はこのやうに誰でも同じやうな氣持であつて「苦しい娑婆」が戀しく「楽しい淨土」が戀しくないのは、單に馴れて居るから初めてだからと云ふ理由だけではあるまいと思ひます。本當によい事ならば始めてであつても飛びついて行くのが人情です。問題はこゝを捨て、かゝりに往くと云ふ場所の關係ではないのに、それを場所の問題として居るところに誤りがあるのであらうと思ひます。淨土は諸上人俱會一處の理想體評準體として示されたものであるから、このからだが此處で死んで、淨土でボカッとは宿がへするやうに生れると云ふのではなく、精神的な(維摩經に「その心淨ければその土淨し」とあるやうに)心の清らかさと、

天地の大生命(即ち無量壽)への歸入の二つの問題が解決されると

ところに「捨此往彼蓮華化生」たる往生があるのであるから、死後は死後としてそれを喜ぶと同時に、必ずしも死後のみに限つたわけがなく、既に法然上人も「一念に一度の往生」と言はれて居りますやうに、現實生活の中にも念佛に依つて往生が味はれるのでありますから、そこまで判れば問題とするに及ばないのではないかと思ひます。然しその當時の一般の人々は分段生死としての往生をのみ往生と限定して考へて居たので、暫く世間に從つた御答へをなさつたのでありませう。

また信仰を何か握るもののやうに考へて居られますが、握られるやうな信仰は餘なものはありません。握るものではありません。本氣で如来様の御名を呼ぶことが出来ればそれでもう立派な信仰なのです。その外の何かを要求するならばそれは「有所得」であつて、信仰をうしろにして居るものです。それはいくら藻掻いても信を得ることは出来ないでせう。イヤ既に「得る」と云ふ言葉が人をあやまらせる原因となつて居るやうです。どうも

言葉と云ふものは不自由なものですね。要するに有所得の氣持では信仰には入れません

領帽とそのわけ

(問) お寺の御僧さん達は何の爲に白帽子を首にかけるのですか。何年以前から初

まつたものでせうか。

(答)

傳教大師に御授戒の時桓武天皇様から御衣の袖を引きちぎつて下し賜つたのが我國に於ける最初のこと、其後弘法大師も嵯峨天皇様から頂いたと云ふ言ひ傳へがあります。淨土宗では圓頓戒の正統八代目を傳承した觀空上人から九代目として慈覺大師九條の袈裟と共に法然上人が傳授されました

で領帽を傳へて居りますが、十月から四月まで使用する規定です。之は装束の一つであつて衣の上から衿にかけるのであります。それを襟巻の代用として衣の下や改良服の下につけるのは違法です。一丈六尺で作るのが本式ですが、多くは八尺の半帽子を用ひます。



とかげの

獨唱

陸軍報道班員

野中勳夫

(文と畫)

蒸される様な緑の木立の中で遠く郭公鳥の聲聞く時は、ほんとに山の中へ来たものよと詩的になれる。これは日本にゐた時のなつかしい思ひ出が、フイリツピンへ来てみるとふんだんにその聲を味ふことが出来た。

尤も初めの中は忙しさにまぎれてその聲もよう耳に入れる事は出来なかつたのだが、バタン戦線の山薬に苦闘した仲間の永井保君(漫畫家の土産話で、——何しろバタンのジャングルはライオンや象等とびだして來さうなすごさではあつたが、勿論猛獸なぞは居らず、比島兵を前線に押し出して戦はせた米

軍兵が相當の猛獸性を持つてゐたと云ふ。さうした猛獸の様な米軍がやけに撃つて來る砲彈下の山薬は、又蟬しぐれでやかましく、おまけに蟬小便のスコール付だつた。こうした中で或る兵隊さんは遠くきこえるカツコウカツコウの聲に内地をしのび

ほとゝぎす 鳴き行く夜の ジャングルはともものし、下の句に頭をひねつてゐるとそばにゐた隊長が

「おい〇〇兵長。貴様たいへんなまちがいをしてるゾ」

「ハッ？」

「その歌のほとゝぎすな。あのカツコウの事だろ。聲だけきいてると相當やさしい姿を想像できるが、ジャングルのカツコウはとかげなんだ」

「ほんとですか隊長殿？」

「馬鹿。俺がうそなぞ云ふものか。俺も初めは内地の郭公をしのんでゐたんだが、比人捕虜に聞いて、然もその姿も見せつけられてガツカリさ。然し聲だけ聞いている分には仲々良

いよ」
私も郭公鳥とばかり思つてゐたので永井君からその話をきいて驚ろいた。私はその時留守部隊としてマニラの宣傳班にゐたから、ジャングルのカツコウはきくことも出来なかつたが、宿舎のアーリントンシアバートはアテネオ大學の木立に包まれてゐて、耳をすませばそのカツコウ／＼の鳴き聲が聴へて來る。然しその姿をマニラでは見る事が出来なかつた。

バタン、コレヒドール攻略なつて、宣傳班の仕事も第二階程に入り、宣傳班の名も報

道部の名に改まつた頃、四人の報道小隊の中に編成された私は、ビサヤ地方のセブで宣撫をやつてゐた。セブ部隊には東京美術学校美術科出身のM少尉がゐて、色々世話して頂き特に私は繪畫の話なぞで戦暇をつぶしたが、或る日スペイン人の畫家を紹介しようと思ふM少尉に連れられてその畫家を訪問した。畫家は奥さんでスペインとフイリッピン人の混血の人だつた。スペイン風のクラシツクな繪や、手藝品を澤山見せてもらつた後、どうして夕食を食べて行けと云ふもてなしで一家そろつての夕食だつたが、こうしたもてなしはフイリッピン人の誰もが誰に對してもすることで、キリスト教信徒的なものだと思ふ。さて御馳走になつてゐる食堂は廊下を利用した所だつたが、柱をのそ／＼とおりてくる五六寸位のとかげを見て私はアツと驚ろいた。一家の人達は私の顔を見てキャツ／＼と笑ひ、奥さんはとりなし顔で

「ケツコウ、ケツコウ」と指さした。驚ろいた顔に結構は少し變だと思つたが、あゝカツコウの事だなと氣がついた私は日本語で何やら返事しつゝあわてゝひつ



かいすカツコウのすばしつこい姿に見とれた。もう二度と出て来ないカツコウには残念だつたが、やつとカツコウ見参の念願を達し

たわけである

後で氣づいたのだが、こゝの人達は無氣味な姿のとかげをも愛し、あたかも日本の農家なぞで見られる蛇の青大将がのそ／＼と天井をはいまはつてもかまはずにゐるあの氣持と同じだと思つた。

それらの事を仲間に話すと春名君(語學關係)は長くフイリッピンにゐた経験から、カツコウの鳴き聲は六聲に限ぎられてゐるんだと云つた。するとやはり長くフイリッピンにゐた寫眞の森さんが「實はその事で面白い話があるんだよ。私達が開戦と同時に監禁されたマニラの日本人クラブでの事だが、たいくつまぎれにカツコウの六聲が問題になり、六聲だ、いやいくらでも鳴くと云ふ事になつて、とう／＼聲實驗となつてしまつた。結局いくらでもなく事がわかり大笑ひだつたよ」ではさつそく此處でも聲實驗と四人が耳をすませば、宿舎の裏山では何匹ものカツコウが高い梢の方で遠く近く鳴いてゐる。

カツコウ。カツコウ。六蔵の時もあつた。

九蔵の時もあれば、なんと十一蔵といふさいのものもある。春名君はアツハツハと笑ひ

「俺の六蔵論はとりけしだ。人にきいたのではあてにならない」となほも笑つてゐる。

所でカツコウにはも一つ縁があるのだが、それは時々行く喫茶店での事である。軍病院

裏のひつこんだ餘りバツとしない店で、若い姉妹二人と、その姉さんの様な母との経営で

あつた。親父さんは餘り店には出ないが、戦前この巡警隊の隊長で今は遊んでゐた。だからこの店も俄商賣でその素人ばい所が人氣を

呼んで居た様なものだが、店の名は「ケツコウ」と云ふ。例のカツコウの事なのだ。私は、むしろ「裏」の方がいゝよと奥さんに云

へば、奥さんはウラつてどう云ふわけと聞くので、病院裏の喫茶店即ちバツクストリート

の店だからと私が返事したので、奥さんはマリーと苦笑ひしたが、實はこの店が何故「ケ

ツコウ」と云ふかミステル、ノナカはわからんだらう。今娘にピアノをひかせるから、す

ると直ぐに納得するであらうと云ふのであつた。私はまつたくあつてからかんとした娘のピアノを聞いてゐたが、ケツコウとピアノがどう關係あるのかさつぱりわからぬ。所がであつた。どこからともなくあの聲

カツコウ カツコウ

ウ／＼

と聞こいて來たのだ。奥さんはそうれみろとばかりニヤニヤ笑つてゐる。つまりこの店ではピアノ伴奏でカツコウの獨唱が聞けるからであつた。

俳壇



太の耳動子

高崎市 大塚 光子

七夕の古りしわが町美しき評 郷里の町に溺愛せず、其の特徴を生かしてゐるのが良い。

和歌山市 太子 亮宏

學行にしたしむ秋の偉大なる評 一年中秋こそ偉大なる感を我等に與ふ。

三重縣 澤 諦準

五月雨や花の流るゝ瓜島評 寫生句として、斯うした方向に進まれんことを望む

岩國市 長岡 白朝

誘蛾燈ひともしる邊に送りくる富山縣 小川 光子

うつくしき徳をかかさて人の秋東京都 山本 竹泉

牛車瓜積んで童愛馬曲岡谷市 久保田 穰

河骨の陰は冷めたし銀洗ふ京都府 松村 城南

朝顔の垣へだてたる湖査し福島縣 横川 芳守

夏めくや蟬やきあへる松の蔭北海道 高島喜八郎

山宮にかぶさり栗の花盛り滋賀縣 田中 霞山

野路たのし手にせる花へ蝶が来る足立區 押野 尚秀

夕立に頭のまろき地藏尊浦和市 瀧川 信雄

あかつきに鳴くひぐらしの殘暑思ふ兵庫傷療 關 尤玲

幾山河越え來しこと上馬冷す東京都 鈴木長春園

高黍の頂枯れし殘暑かな京都府 中野 貴川

甜瓜賣り見てをれば母に似てきたる同 野村 雀人

朝顔にやる水の音さはやかに京都府 黒野 智善

居眠りをしてゐたりけり蚊にさくる栃木縣 大輪 益啓

撫子の花に立つ子や蟬迷がす名古屋市 山田順證

蟬の鳴く聲きゝてこそ夏來る投稿規定 官製ハガキ一回二句以内淨土編輯部俳壇係あてに送ること



至誠の人となりた

— 法然上人御法語(二十二) —

中村 辨 康

法 語

問。さては念佛の安心をば如何様に心得候べき。答。三心を具足せさせ給へ。その三心と申すは、一には至誠心。二には深心。三には廻向發願心なり。

一に至誠心といふは眞實の心なり。善導釋しての給はく、至といふは眞の義、誠といふは實の義、眞實の心の中に、この三界六道の自他の依正二報を厭ひ捨て、三業に修するところの行業に必ず眞實を用ひよ。外に賢善精進の

相を現じて内に虚假をいだくものは、日夜十二時につとめ行ふ事、頭の火を排ふが如くにするとも、往生を得ずとなり。たゞ内外明闇を選ばず眞實を用ゆる故に至誠心と名く。

(要義問答「法語抄」八六、八七)

解 説

「安心」とは「あんしん」ではなく「あんじん」とにごつて讀みますが、それは心の置き所がはつきりときまつたことを指して言ふのであります。

また「安心立命」と續けて言ふやうに「生命觀」が確立したことであります。即ち無量壽の如來様に我が生命を

まかせ、身も心も一切合切まかせ切つたところに、心の置きどころも動搖せず、命に對する不安もすつかり無くなつて仕舞ふのであります。

その心狀を解剖して見ますと、凡そ三通りになるとして、一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心と觀無量壽經と云ふお經に書かれてありますが、今その至誠心に就いて簡單ながら一應御説明下さいましたのがこの御法語

なのでございます。

それも支那の善導大師の觀經釋と云ふ本の文句を引用して

至と云ふは眞の義、誠と云ふは實の義、眞實の心の中にこの三界六道の自他の依正二報を厭ひ捨て、三業に修するところの行業に必ず眞實を用ひよ。(中略) 内外明闇を選ばず眞實を用ゆる故に至誠心と名く

と説明に替へて居られるのであります。實に簡にして要を得て居るのであります。

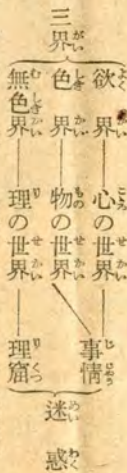
然かもこの文句の中で、特に注意されてあるところがあるのであります。それは「眞實心中に三界六道の自他の依正二報を厭ひ捨て、三業に眞實を用ひよ」の一節であります。

一般に淨土教の厭欣思想を以て「厭世教」の如くに思做して非難する人も嘗てありましたが、この文句を味へばその非難が全く的はづれであることが明らかにになるのであります。

即ち第一には眞實心の中に頭から斷つて居る點であります。是れ畢竟心の問題であつて我が日本の國を指して居るものでないことを立證して居るのであります。

其の上に更には「三界六道」と云つて私達の生活上のことを言つて居るのであります。一心十界と云ふ言葉の示すやうに、十界は何處までも心の行き方でありま。即ち一心に十界を具へて居り、その十の道をグル／＼と輪廻して居るけれども、四聖の道の方は歩かずに(即ち聖道の修行)六つの道ばかりをさ迷つて居るのが私達の現實生活であります。

されば其の六道を要約すれば三界となりますが、三界は更に



事情と理窟との二つに要約されます。事實私達はこの事情と理窟とに縛られて迷惑しつゝあるのであります。しかもこの迷惑に依つて自分の

依報——社會や家庭等の身の廻りの状態



この二つの状態が餘り面白くありませんから、それを反省し何處までも至誠を以て萬事を行つて行かうと努めなけ

ればならぬのであります。それが至誠心であります。

されば至誠心はやがて何處までも「三業至誠」であり何處までも自己の「行業」を清淨にしやうと願望して行くことになるのであります。

この故に淨土教は決して「此の世を厭ひ」捨てるとか、または「この處を厭ひ」嫌ふとか云ふので絶対にありません。

此岸と云ひ彼岸と云ふのも畢竟は迷悟の相違に過ぎないのであります。決して此の國から向ふの國へ行くと云ふやうな存在的理解の上から論じて居る話はないのであります。

佛教の「悟」と云ふことはかうした存在觀念を破るところに名付けられて居るのであります。「破有」と云ふことが勢ひ「無」の思想を呼び起して居りますが、その「無」なるものが若し「無なる状態」と云ふ「存在觀」の上に立つて居るのであるならばやはり誤りであります。ですから空と云ふ言葉を使つても、随分誤られて來ましたので、古來十八空と稱へて十八回も空と云ふ字義から誤りを生じ易いものを否定し否定し否定しつゝして行つて、そこに眞實なるものを言ひ顯はさうと苦心したのであります。遂にう

陸海軍病院「慰問淨土」

寄附者芳名 (敬稱略)

- 五十圓 廣島縣吳市本通二一ノ二 正覺寺婦人會 ○十四圓四十錢 奈良縣高市郡八木町 山口清太郎 ○六圓 滋賀縣水口町新城永福寺 福原良廣 ○六圓 大連市羽衣町九 朝岡 豐一 ○五圓 小樽市入舟町八ノ三二天上寺 石上皆應 ○五圓 北海道増毛郡増毛町大字阿分村二七 相馬誠作 ○三圓 長崎縣南高來郡神代村 堺虎次 ○三圓 千葉縣生濱町大覺寺 阪本善學 ○三圓 島根縣安來町 西方寺 ○三圓 滋賀縣蒲生郡北比都佐村内地攝取院 岸定雲 ○二圓 高知縣幡多郡大方村 安光政野 ○一圓五十錢 岐阜縣稲葉郡鏡島村江崎松井教導 ○一圓五十錢 東京都本郷區駒込光源寺中 島田俊宏 ○一圓五十錢 同本郷區駒込光源寺檀徒 石黒喜久一 ○一圓五十錢 茨城縣土浦市子東町一二八 ○沖戸京子 ○一圓五十錢 兵庫縣有馬郡鹽瀬村 古本サダ ○一圓五十錢 埼玉縣大里郡榛澤村 宇野イチ ○一圓五十錢 愛知縣碧海郡新川町 松枝成應 ○一圓五十錢 千葉縣曾我町曾我野 五十嵐伊三郎 ○一圓五十錢 廣島市已斐中町 木村ヨシ ○五十錢 東京都北多摩郡小平村小平學園 萩原通孝

まい言葉が見出されなかつたのであります。

然しながらそれは消極的態度に立つたからであります。

積極的な立場に立つて、人間の眞實の目的は、「眞實に生きる」ことにある事を明らかにすればよかつたのであります。

この「眞實に生きる」と云ふことは道德的には取りもなほさず「至誠一貫」と云ふことであります。ですから「外に賢善精進の相を現しても内に虚假を抱いて」居ては眞の姿ではありませんから、晝夜十二時ぶつと通しに一生懸命にはげんでやつても、元來が見せかけであり外見だけのお體裁に過ぎませんから、本當に生きることは出来ないのであります。

然るに私達は内心と外觀と中々一致いたしません。すぐお體裁を飾りたがります。小人閑居して不善をなすと云ひますが、全くその通りで、獨居して居ると相當赤裸々な勝手なことをして居ります。然るにそこに一人でも子供が居ればもう自分勝手な氣持は掣肘されて、若干のお體裁を作る氣になります。誠に我ながら可笑しい次第であります。

これは私ばかりのことでなく大概の人が屹度さうであらうと存じます。眞面目に内外共に偽りのない狀態を堅持したいとは思ひながら、それは思ひだけであつて事實は中々

思ふやうに行きかねるのであります。

また「往生」と云ふことも、見やうに依つては偽惡醜の不眞實生活をやめて眞實生活に生れ替ることですから、偽惡醜のある間は本當の往生にはなれないのであらうと思ひます。此の故に如來様の加被力に依て至誠心を以て一生を貫いて行かうとの念願に燃えざるを得ないのであります。

私達はせめて念願だけでも常に「至誠でありたい」と念じて行きたいものであります。自分には力はないが、是非如來様の加被護念に依つてさうあらせて頂きたいと思ひます。それが即ち「内外明闇を選ばず眞實を用ひよ」と善導大師が勧めて居らるゝところでもありません。

誠に獨り信仰ばかりではありません。人生の一切に取つて「至誠」は絶対に必要であります。

人多人の中にも人ぞなき
人となせ人となれ人

と云ふ古歌は畢竟はこの至誠人を求めて居ることでありませう。本當に至誠人になりたいです。

たつた一度しかない人生です。この人生を本當に無駄に空費したくありません。本當に至誠人になりたいです。至誠人になり得たら、もう命も何もないと思ひます。

知恩院門跡 郁芳隨四序・増谷文雄著
淨土宗管長 大島徹水

行 誠 上 人

B 版三三〇頁 定價一圓五十錢 送料十二錢

學識に德行に一世に秀でた上人の全傳成る！
人の言説行業はそのまゝ信仰の深底にして讀者を
感化せずんばおかぬ。

稀代の善知識に私淑せられよ

急告！

左の書籍は品切れとなりました
ので何卒御註文なさやう願います

中 村 辨 康著

日常勤行式講讃 品切れ

法然上人鑽仰會編

念 佛 讀 本 品切れ

淨土宗讀本・法然上人法語抄 品切れ
法然上人の信仰生活・御影

編輯後記

◇吉田絃二郎先生から相も變らず御指導をいたゞき感謝いたします
◇岡本一平、大野法道兩先生とも折悪しく御都合により玉稿を休載いたしました。御寛容願ひます。
◇書籍の御注文や新入會員の方で葉書だけの御申込みは堅くお断りいたします。代金が着いてから送料申し上げます。

◇従来は會費の御納入が多少遅れても引續き送本いたしました事もありますが、發行部數に制限がありまゝすので前金切れと同時に送本を停止致し納金を待つてお送りします
◇會費御納入に對し小惑舊の場合でも領收書は發行いたします。
◇お問合の場合は往復葉書か、又は返信料を御同封願ひます。
◇中村辨康師著「信仰問答」の發刊は都合により豫定より多少遅れます。何卒お含みおき願ひます。

淨土 十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年九月五日印刷納本
昭和十年十月一日發行

(定價十二錢)

東京都芝区芝公園十五號明照會館

編輯兼 眞野正順
發行人

東京都芝区芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄

東京都牛込區圓町七 (東區二)
印刷所 大日本印刷株式會社

配給元
東京都練田區濱田町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會
東京都芝区芝公園明照會館

電話東京八二一八七番
會員證號二三〇〇七

「淨土」購讀規定

定價 金十二錢 (送料一錢)

會費 金一圓五十錢 (送料共)

一ヶ年

刊 近

信仰問答

賣價三圓十五錢
定價 三 圓
特別行爲稅 十五錢
相當額
送料十五錢

總ゆる難問疑義に明解を與へた活きた信仰案内書

著者が「淨土」誌上に創刊以來擔當してゐる「信仰相談」は各方面に非常な好評を博してをります。それは問ふ者は切實な信仰上の悩みや疑ひをぶちまけ、答へる者はそれを親身になつて懇切に指導してゐるからです。今こゝにその「信仰相談」中の主なもの約二百を選び系統的に配列して一冊の書物としました。故にこれは懇切な信仰の案内書であり、最も平易に書かれた佛教讀本であり佛教辭典でもあります。著者の公正な立場は淨土宗たると他宗たるを問はず、信仰を求め、教義を探らうとする人たちを首肯せしめるでせう。

誰がも聞き且つ知らんとする

興るた々津、め集をみの題問

るへ與を針指の仰信に内の味

最寄の書店へ御申込置き
下さい。附近に書店のな
い方は直接本會宛送料を
そへて御申込下さい。

でもあります。著者の公正な立場は淨土宗たると他宗たるを問はず、信仰を求め、教義を探らうとする人たちを首肯せしめるでせう。

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可。(毎月一回一日發行)
昭和十八年九月廿日印刷納本。昭和十八年十月一日發行

淨土第九卷第十號

停
 定價金十二錢
 滿鮮臺等
 外地定價金十三錢
 (送料錢)

館會照明園公芝區芝都京東
番七八一二八京東替換

會仰鑽人上然法 所行發